

# LMSを活用した多人数授業における アクティブ・ラーニングの実践

## Active Learning Utilizing Learning Management System in Large-Class

岩崎千晶\* 中橋 雄\*\*

\*関西大学教育推進部教育開発支援センター

\*\*武蔵大学社会学部

Abstract: The purpose of this paper is to report the design and learning strategies for the course titled Media Expression of mass-class, enhanced by the forum feature of a Learning Management System, and then to share with readers the learning effectiveness, compared with the learning outcome of the earlier course design. In the new design of the course, students in the classroom are exposed to the topics prepared by the instructor. For each topic, the students are divided into groups to brain storm, discuss, and share their opinions and views. Each group presents their summaries of the activities in front of the class. After class, each student takes time to digest and organize the contents of the class and post their own view to the forum. By this spiral learning strategies, the students accept others' views and opinions and think about topics more deeply. As the result, the students will acquire diverse views of looking at the topics before forming their own opinions.

Keywords: active learning, learning management system, large class, media literacy

### 1. 研究の背景

知識基盤社会が到来し、学生は他者とともに学ぶことで多様な意見を知り、自分なりの意見を考える思考力が求められるようになった<sup>[1]</sup>。しかし日本の大学は多人数授業が多く、学生は授業に対して受け身になりがちであることが問題となっている<sup>[2]</sup>。現行の大学のシステムでは多人数授業を急減することは困難であるため<sup>[3]</sup>、多人数授業の改善が必要だと指摘されており<sup>[4]</sup>、その方策の一つとしてアクティブ・ラーニング (AL) が注目されている。ALは問題解決学習や協調学習など学習者の能動的な学習を取り込んだ授業形態を特徴づける包括的な概念である<sup>[5]</sup>。日本の大学では演習や少人数授業でALの実践が行われているが、多人数授業におけるALの実践は少なく、授業デザインの蓄積が求められている<sup>[6]</sup>。

### 2. 研究の目的

本研究では多人数授業「メディア表現論 (2年次配当/受講生99名/中橋雄担当)」を事例に、LMS (Learning Management System) を活用したALをデザインし、その評価を行うことを目的とする。本研究では、ALを自らの思考を促す能動的な学習<sup>[5]</sup>と緩やかに定義し、中でも「多様なものの考え方」を知り、「自分なりの意見」を考える力の育成を目指した。

### 3. ALのデザイン

多人数授業では学生が受け身であることが問題だとされているが<sup>[2]</sup>、学生が思考し「自分なりの意見」を発表できれば、実に多くの意見を知ることができる良さがある。その学生の思考を促すためには、ある事柄に対して複数の多様な考え方を示し、それを踏まえて「自分なりの意見」を考える機会を設けることが必要だと荻谷は指摘する<sup>[6]</sup>。そのためには他者の存在が重要となる。他者の存在は自らの思考を相対化し、思考を促すことにつな

---

Chiaki Iwasaki\* Kansai University,  
Yu Nakahashi Musashi University  
\*E-mail: ciwasaki@kansai-u.ac.jp

がるからである<sup>[5]</sup>。そこで授業では「授業中に全体に向けた発言」「グループワーク」「フォーラムでの意見交換」を組み合わせて、数多くの学生と意見交換をする学習活動を取り入れた。

まず授業では、教員が設定した「立場によって多様な考え方が存在する課題」に対して、学生が個別で考える。その後、学生は同じ課題に対して授業で意見を発表したり、グループで話し合ったりした。様々な意見に触れることで学生が「多様なものの考え方」を知ることの重要性を認識し、他の学生の意見を知りたいと意欲を持ち、能動的に学習に取り組めるのではないかと考えた。また授業で発言し、グループで話し合うには、「自分なりの意見」を述べる必要があるため、学生は受け身ではなく、自分の主張を考えながら能動的に授業に取り組むだろうと考えた。

しかし、授業中は意見を聞くことができる人数や考える時間が限られているため、多様な意見を解釈し、「自分なりの意見」を十分に検討できない可能性もある。そこでLMSであるCEASのフォーラムを活用し、学生がより多くの学生の意見を閲覧し、時間をかけて思考を深め、「自分なりの意見」を出せるようにした。なお、ここでの「自分なりの意見」とは、他者と異なる意見や他者と同じ主張でも視点を変えた意見とする。

こうした学生の活動を支援するために、当該科目を履修済みの上位学年の学部生2名をLA (Learning Assistant) として導入した。LAはグループワークを補助したり、投稿を整理した結果を次の授業で紹介したりし、学生の主張が拡散しすぎないように、また学生が「自分なりの意見」を考えるよう促した。

一連の活動(図1参照)を繰り返すことで、授業外においても、学生が授業内容について考える機会を持ち、学習に能動的に取り組めるようにした。LA、教員の授業内、授業外での活動は表1に示す。

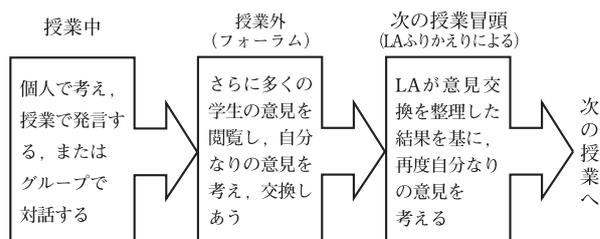


図1 授業の流れ

表1 授業内、授業外における活動

	授業内	授業外
学生	授業を聴講し、課題について考え、グループで対話したり、発表したりする	他者の意見を閲覧し、フォーラムに意見を投稿する
LA	グループワークのファシリテートをする、フォーラムの意見を整理し、紹介する	フォーラムの意見を整理し発表準備をする、教員と発表内容や次の授業について話し合う
教員	授業をし、適宜グループワークのファシリテートをする、LAによるフォーラムのまとめに対するコメントをする	フォーラムの議題を設定する、フォーラムを閲覧し学生の学習状況を把握する、LAと授業の活動について打ち合わせる

フォーラムを活用した授業実践は従来の研究でも報告されている<sup>[7]</sup>。しかし、ALを取り入れた多人数授業において、「多様なものの考え方」を踏まえた上で「自分なりの意見」を考えるために、フォーラムを活用した実践は十分蓄積されておらず、本研究の意義があると考えられる。

#### 4. ALの実施

「メディア表現論」は、社会におけるメディア表現の意義と方法を学ぶ授業で、隔週2コマ連続・全7回で実施された。各回の主なテーマは①メディア・リテラシー、②ジャーナリズムとモラル、③広告分析、④広告制作、⑤ドキュメンタリー番組における演出、⑥市民メディア、⑦メディア表現技法である。

授業では、学生が「多様なものの考え方」を踏まえた上で「自分なりの意見」を考える状況をつくりだすための工夫として、講義に加え、メディア分析・制作体験、グループでの意見交換、全体への発表などの学習活動を

テーマに応じて取り入れた。以下では、具体的な事例を二つ紹介する。

### (1) 第2回「ジャーナリズムとモラル」

この授業回では、「ハゲワシと少女」というタイトルの写真を学生に見せて意見交換をさせた。これは腹を抱えるようにうつ伏せに倒れこんでいるやせこけた少女をハゲワシが狙っている写真で、スーダンの飢餓の悲惨さを伝えている。まず、この写真について「もし自分がジャーナリストなら報道と人命、どちらを優先させるのか」を個別に考えさせた。そして、数名を指名し発表させ、多様な意見が存在しうることを全体で共有した。さらに、授業後にフォーラムで改めて同じ問いについて議論させた。

この授業回は多人数の良さを活かし、学生が多種多様な考え方に触れ、自分なりの主張を論理的に説明できるようにした事例である。

### (2) 第4回「広告制作」

「広告制作」をテーマにした授業回では、学生がコピーライターになったつもりで所属する大学のキャッチコピーを考えさせた。これは送り手の立場に立つことで、メディアが意図を持って制作されていることを実感させることが目的である。教員はまずプロのコピーライターがキャッチコピーを考えるプロセスを描いた番組を学生に視聴させた。そして、個別にキャッチコピーを10個書かせた。その後、グループになってキャッチコピーのねらいや意図について意見交換をさせた。話し合いが進まないグループには、教員やLAから質問を投げかけ、話し合いが活発になるよう働きかけた。授業後は「各自が考えたキャッチコピーとグループの中で最もよいと思うキャッチコピーとその理由」を投稿させた。

このように、この授業回では協同的な活動や相互評価活動を繰り返すことで、学生は多様な他者の考えを学び、視野を広げた上で自分なりのものの見方を養うことをねらいとした。

## 5. 調査方法

2009年秋学期に「メディア表現論」の受講生116名に予備調査をした。2010年春学期は本調査として授業前、授業後に質問紙調査をした。受講生99名のうち、89名が回答し、有効回答数は75名であった。

ALでは意見交換など学生の外的な活動に着目するだけではなく、学生が活動の意義を理解しているのか、実際にどう思考しているのかなど、学生の内的な活動に着目する必要がある<sup>[8]</sup>。そこで、本研究では①「多様なものの考え方」を知ること、②「自分なりの意見」を考えることに対して、学生がその重要性を認識しているのか、また実施できるようになったのかを調査した。②に関しては、授業、グループワーク、フォーラムの側面から調査した。またALは授業内だけで学習を完結させてしまうものではなく、授業外においても学習に取り組む姿勢が重要だと指摘されている<sup>[9]</sup>。そこで③ALを通じて、学生が授業外においても、学習内容について考え、学ぶ機会を持てるようになったのかを調査した。また④学生の活動を支援するLAの寄与についても調査した。

質問紙では他にも質問をしているが、本研究では上記に関連する項目を分析対象とした。質問項目には4件法（4：そう思う、3：ややそう思う、2：あまり思わない、1：思わない）で尋ねた。調査結果は事前と事後の評価に差があるかどうか、両側で符号検定を行った。④は、事後調査のみであったため、平均値と標準偏差（SD）を分析データとした。また質問紙の結果を補足するため、フォーラムの投稿を事例として提示した。

## 6. 結果と分析考察

フォーラムにおける投稿状況について述べる。総投稿数は1,247件で、毎週平均178件の投稿があり、一人あたり1.79件を投稿していた。

事前・事後調査の結果を表2に示す。項目9は有意水準5%で、項目1～5, 7, 8, 10～12は1%で有意差が認められた。項目6には有意差が認められなかった。

表2 事前・事後調査の結果(4件法)

質問項目	事前 平均(SD)	事後 平均(SD)	P値
1. 他の学生と意見交換をすることは重要である	3.06 -0.64	3.41 -0.54	.000 **
2. 他の学生と意見交換をする機会を持ち、他の学生の意見を聞きたい	2.42 -0.71	2.92 -0.80	.000 **
3. グループワークで初めて会う人に対して自分の意見を積極的に伝えることができる	2.06 -0.89	2.69 -0.82	.000 **
4. 授業内容に対して、自分なりの意見を持つことは重要である	3.54 -0.55	3.77 -0.42	.004 **
5. 授業中は教員の話聞きながら、それに対して自分の意見を考えている	2.74 -0.57	3.30 -0.56	.000 **
6. グループワークのとき、短い時間で自分の意見をまとめて発表するのは難しい	3.40 -0.73	3.24 -0.78	.265
7. グループワークでは、他の学生とは違う意見を発言してみようと思い、自分なりの視点や主張を考えている	2.33 -0.64	2.68 -0.70	.000 **
8. フォーラムでは、他の学生とは違う意見を載せてみようと思い、自分なりの視点や主張を考えている	2.45 -0.72	2.89 -0.79	.000 **
9. グループワークのとき、他の学生と対立する意見でも自分の意見を伝えることができる	2.61 -0.85	2.81 -0.80	.035 *
10. フォーラムでは、他の学生と対立する意見でも自分の意見を伝えることができる	2.84 -0.75	3.33 -0.68	.000 **
11. 友達と授業内容について意見交換をするようにしている。	2.05 -0.75	2.68 -0.91	.000 **
12. 日常生活でメディアの表現について意識して、メディアに接している	2.52 -0.77	2.96 -0.70	.000 **

\*p<.05 \*\*p<.01

(N=75)

① 「多様なものの考え方」を知ることに  
関する分析考察

学生は事前調査においても他の学生との

意見交換が重要だと認識していたが、授業を通じてその重要性をさらに実感していったことが伺える(項目1)。そして、学生が他の学生と意見を交換する機会をより望むようになっていることが示され(項目2)、授業デザインが有効に機能したことが示唆された。その背景には、学生が授業やフォーラムで、一つの課題に対する「多様なものの考え方」に触れる機会を得たことが影響していたと考えられる。例えば第2回の授業では、1枚の写真に対して「写真を撮影するべきである」「人命を優先し写真を撮影するべきではない」「撮影後に助けたい」と、学生の意見は三つに分かれた。また第4回のフォーラムでは一つのテーマに約120個のキャッチコピーが投稿された。このように学生は数多くの意見に触れる中で、「多様なものの考え方」の重要性を実感するようになっていったと考えられる。

② 「自分なりの意見」を考えることに関する分析考察

学生は事前調査において授業内容に「自分なりの意見」を持つことを重要だと考えていたが、その実施に関しては平均値が低かった(項目4, 5)。しかし事後調査では、授業を聞きながら「自分なりの意見」を考える学生の平均値が上がっていた。また第2回のフォーラムでは、「報道により一つの命だけではなく、何百人何千人の命を救うことができます。なので、私は報道を優先します」という投稿に対し、別の学生が「報道を優先したい気持ちは分かるが、人命を優先するべき」と返答し、学生が「多様なものの考え方」に触れ、その考え方を解釈した上で、ジャーナリストの責務に対し「自分なりの意見」を交わす様子が見受けられた。加えて第7回のフォーラムでは「他者との意見交換やグループで討論して、こういう意見もあるのだ、と人の意見を参考にしながら、自分の意見をしっかりと持つことも大事だと思いました」

という意見も投稿された。

一方で学生は事後調査においてもグループワークで短い時間に自分の意見を伝えることに難しさを感じており、今後の課題となった（項目6）。しかし、難しさを感じながらも学生は面識がない学生にも積極的に「自分なりの意見」を伝えるようになっていった様子が示された（項目3）。その際、学生は他者と異なる意見を出そうとし（項目7, 8）、対立する意見でも自分なりの主張を伝えるようになっていった様子も伺えた（項目9, 10）。

以上のことから、学生は授業やフォーラムで、「自分なりの意見」を考え、発言する中で、「自分なりの意見」を持つことの重要性を認識し、能動的に授業に取り組む姿勢の形成されていることが示され、授業内のALと授業外のフォーラムを併用した効果を指摘できた。

③ 授業外における学びに関する分析考察  
学生は授業外に学生同士で授業内容について話す機会を持つようになり（項目11）、日常生活においてもメディアの表現方法を意識的に考えるようになっていったことが伺え（項目12）、授業外でも学生に授業内容について考える態度が育成されるようになったことが推測された。

#### ④ LAの寄与に関する分析考察

学生はLAによるフォーラムのふりかえりを新たに自分の意見を考える機会だと捉え、授業への理解をより深めていることが示され、LAが学生の活動を支えていることが指摘された（表3参照）。

表3 LAの寄与に関する事後調査の結果（4件法）

質問項目	事後平均(SD)
13. LAによるフォーラムのふりかえりは、問題提起を含んでおり、新たに自分の意見を考える機会となった	2.92 -0.87
14. フォーラムのふりかえりで、LAが学習者の意見を解釈して説明することで、より授業の理解が深まった	3.19 -0.74

(N=75)

## 7. まとめと今後の展望

学生は授業やフォーラムで他者の意見に触れ、「多様なものの考え方」を知り、さらに自分の主張を検討するプロセスを通じて「自分なりの意見」を考えることができるようになり、学生の思考力を育む能動的な学習に関して一定の成果を得られた。しかし本研究は一事例に過ぎない。今後は受講生数が増えた場合や科目特性が異なる授業を対象とするなど事例の蓄積が求められる。

## 参考文献

- [1]文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm)  
(2010年8月15日参照)
- [2]宮田仁:知識共有をめざした多人数講義をサポートする携帯電話対応写真データベースシステムの開発とその効果.日本教育工学会論文誌31(Suppl.), pp.173-176, 2008.
- [3]橋本勝:新・情報文化論の授業展開. 情報文化学会全国大会講演予稿集10, pp.5-8, 2002.
- [4]木野茂:教員と学生による双方向授業—多人数講義系授業のパラダイムの転換を求めて—. 京都大学高等教育研究15, pp.1-13, 2009.
- [5]溝上慎一:アクティブ・ラーニング導入の実践的課題. 名古屋高等教育研究7, pp.269-287, 2007.
- [6]苅谷剛彦:知的複眼思考法. 講談社, 1996.
- [7]永田智子, 鈴木真理子, 中原淳, 西森年寿, 笠井俊信: CSCL環境による異教科領域間交流が教員養成系大学生に及ぼす学習効果. 日本教育工学会論文誌28(suppl), pp.5-8, 2005.
- [8]松下佳代:主体的な学びの原点. 大学教育学会2008年度課題研究集, 2008.
- [9]須長一幸: アクティブ・ラーニングの諸理解と授業実践への課題—activeness概念を中心に—. 関西大学高等教育研究創刊号, pp.1-12, 2010.

本研究は、教育GP関西大学「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開—大学院生スタッフとともに進化する“How to Learn”への誘い—」の研究成果の一部である。